

夜汽車の食堂

中原中也

青空文庫

雪の野原の中に、ひとすぢ一条のレールがあつて、そのレールのずっと地平線に見えなくなるあたりの空に、大きなお月様がポツカリと出てゐました。レールの片側には、真ツ黒に火で焦がされた、太い木杭が立ち並んでゐて、レールを慰めてゐるやうなのであります。そのレールの上を、今、円筒形の、途方もなく大きい列車が、まるで星に向つて放たれたロケットのやうに、遮二無二走つて行くのでした。

その列車の食堂は明るくて、その天井は白いロイドで貼つてあり、飴色の電燈は、カツカと明つて燈つてゐました。其処に僕はゐて、お魚さかなフライにレモンの汁をしたたか掛けて、これから食べようとしてゐたのです。僕が背ろを振り向くと、会計台の所には、白い上衣のボーイが一人立つてゐて、列車の動揺に馴れ切つた脚あしつきで、でもシヤチコバつて立つてゐるのであります。僕のほかにはお客は誰も居なく、どうしたとか、女給も一人も見えないのでした。

僕が美味しい美味おいしいと、そのお魚フライを食べてゐると、やがてツカツカと、白い大きいエーレをかぶり、青い洋服に薄い焦茶のストッキングをはいた、大きなアメリカの小母さんが這入つて来ました。そして僕の耳を引つ張つて、僕の頭を揺すぶりながら、「そ

んなにレモンをかけて食べる人ありますか！」と云ふのでした。

僕は怖くなつて、とてもそのアメリカの小母さんの顔が見てはゐられなくなつて、窓の方に眼を向けると、雪の原には月が一面に青々と光つて、なんだか白熊たちは雪達磨ゆきだるまをこしらへてゐるのでした。

汽車は相変らずゴーツといつて、レモンは僕の目にしみて、僕はお母さんやお父さんを離れて、かうして一人でお星の方へ旅をすることが、なんだか途方もなくつまらなくなるのでありました。

汽車はゴーツといつて、青い青い雪の原を、何時までも停まらず走り続けました。

僕は段々睡くなつて、そのうち卓子の上に伏せつて眠りましたが、するとお庭の椽側のそばの、陽を浴びた石の上で、尾を立てたり下ろしたりしてゐる、プチ公（犬の名）の夢を見るのでした。女中ねーやはこれから郵便局に、手紙は出しに行つて来ると云ふのでした。

青空文庫情報

底本：「新編中原中也全集 第四巻 評論・小説」角川書店

2003（平成15）年11月25日初版発行

※底本のテキストは、著者自筆稿によります。

※（ ）内の編者によるルビは省略しました。

※底本巻末の編者による語注は省略しました。

入力：村松洋一

校正：noriko saito

2015年2月17日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

夜汽車の食堂

中原中也

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>